

マリアノ・フォルチュニイの実物衣装の研究

能澤 慧子

A Study on the dresses of Mariano Fortuny

Keiko NOHZAWA

はじめに

マリアノ・フォルチュニイ (Fortuny, Mariano 1871-1949) は1903年以来、約35年間に亘り、女性の衣服用のテキスタイル、及びそれを用いた衣服のデザイン・制作を続け、死後60余年を経た現代まで、その作品はさまざまな意味で高く評価されてきた。その美しさに魅せられた多くの研究者たちが、彼の作品の制作方法を研究してきたが、特許権申請書の内容が残されているにも関わらず、いまだに十分に解明されてはいない。恐らくフォルチュニイは一つの段階に踏み留まることを知らず、特許申請後も絶えず改良を加え、新たな創造を繰り返していたためであろうとされる。

フォルチュニイの作品はプリーツを全体に施したドレス「デルフォス」のグループと、ステンシルを施したテキスタイルを用いた衣服のグループとに大別される。本稿は、これらの作品の再現を試みる長期的研究の一環として、服装史研究室管理のステンシルを施した実物資料の形態、裁断法、仕立て方、装飾法などについての調査をもとに、その制作年代、彼の衣服デザイン全体における位置づけを明らかにし、さらに彼の美意識を探ろうとするものである。

調査対象は、平成18年度本学服飾美術学科教育研究機器備品費により購入した以下の2点の資料である。

1. 黒紵地ざくろ文様ステンシル オーヴァーガーメント (図1)
2. 赤ヴェルヴェット地葡萄文様ステンシル オーヴァーガーメント (図2)

1. 黒紵地ざくろ文様オーヴァーガーメント

(1) 調査結果

透き通る紵を用い、袖と身頃が一続きに変形T字型に裁断され、前後1枚ずつ、合わせて2枚のパネルから構成されたチュニックで、デルフォスの上に重ねて着用するために作られたと考えられる。前後の上端中央部分と裾から身頃の脇と袖下部分を経て袖口に続く縁に沿ってステンシルが施され、肩の開き部分、身頃脇から袖下部分を経て袖口に続く縁、及び裾にガラスのビーズ(トンゴ玉)の装飾が付いている。製作年は1910年頃とされる。レーベルは無い。



1 - a



1 - b



1 - c



1 - d

図1 作品1 黒絹地ざくろ文様オーヴァーガーメント



2 - a



2 - b



2 - c



2 - e



2 - d

図2 作品2 赤ヴェルヴェット地葡萄文様オーヴァーガーメント

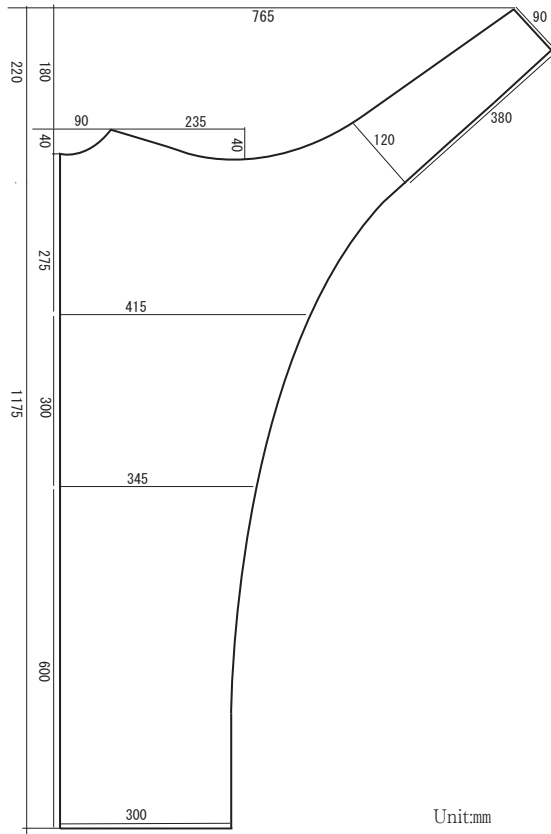


図 3-a 作品 1 後のパターン

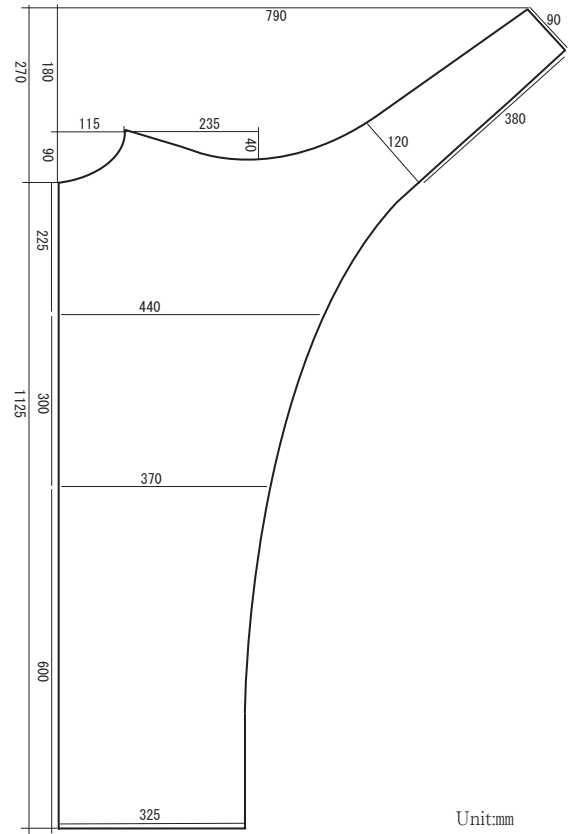


図 3-b 作品 1 前のパターン

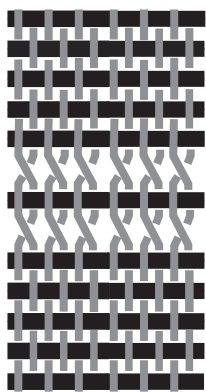


図 4
作品 1 生地織目

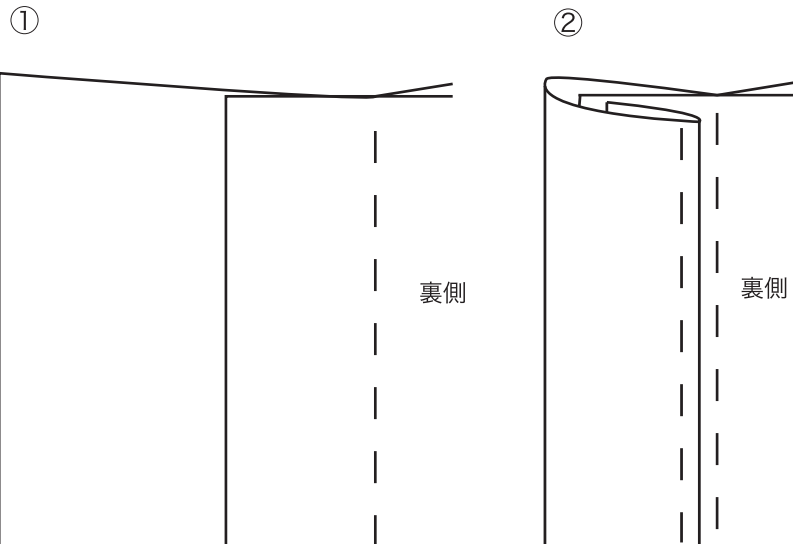


図 5 作品 1 縫い代の始末方法

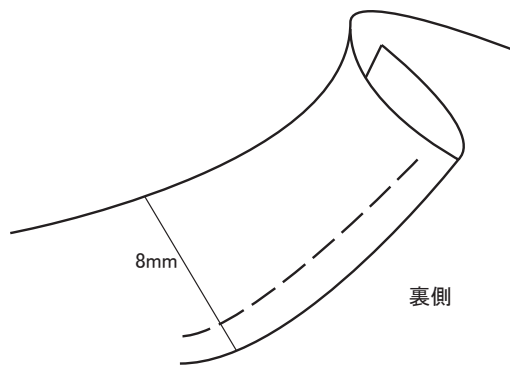


図6 作品1 衿ぐりの始末方法

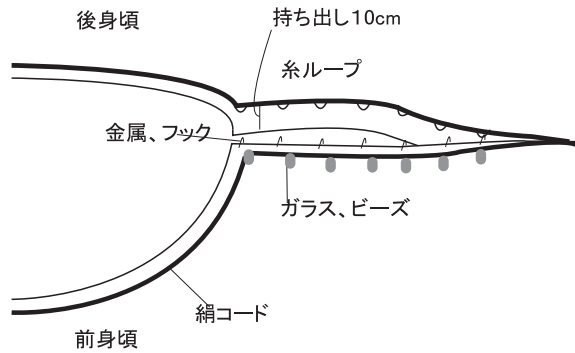


図7 作品1 肩明部分の仕上げ

1) 裁断法

前、左右の幅は1580mmあり、これ以上の幅のある織物であることが分かる。

前幅は後幅より50mm狭く、その差分は衿ぐりの前後差で吸収され、その他は前後全く同型である(図3)。

2) 生地

わが国の5本縞の組織と同様の組織で、縦糸368本/10cm、横糸360本/10cmの、極めて薄い織物である(図4)。

3) 縫製

すべて手縫い。

縫合は腋から袖下に続く線、及び肩と袖山線の4本のみであり、いずれも図のように、縫い合わせた片方の縫い代で、もう片方をくるみ、縫い押さえる方法をとっている。縫い代の仕上がり幅は約4mmと、細い、繊細な仕上がりである(図5)。

衿ぐりは裏側に折り、仕上がり8mmの三つ折にして端を細かな並縫いで抑えている(図6)。

裾と袖口はよりぐけ。

両肩の明きは、後肩の縫い代を長く残して、内側に折り、10mm幅の持ち出し布として、7組のフックと糸ループで開閉する(図7)

4) 装飾

ビーズ 直径7mm、長さ5mm。管玉型。半透明白色。縦に細い筋入り。

腋から袖下にかけての縫い目線上に、左側92個、右側90個。右側は紛失の跡あり。

袖口に左右とも10個ずつ

裾、前側29個、後側33個。前側には5,6個の紛失の形跡あり。

コード 絹の撚りをかけたコード。直径3mm。

ビーズを通し、これを裾、腋から袖下にかけての縫い目線、袖口に縫い糸で巻きつけながら縫い付けている。

ステンシル 現状では薄い灰色のステンシルが施されている。但し拡大鏡を通して観察すると、

ステンシル部分の織糸の間隙に金属的な光の粒子が見られる。

前中央、後中央に大型モチーフ。

前：幅最大部分 340mm、長さ前衿ぐりから 290mm (図 1-d)。

後：幅は衿ぐり続いたため、特定しにくい。長さ後衿ぐりから 105mm。

裾から脇、袖下、袖口にかけては約 70mm 幅、長さ約 130mm のモチーフの繰り返しによる帯状の文様となっている。裾の左右両端、袖下と袖口の交点部分はモチーフが角に合わせてアレンジされている (図 1-c)。

5) 重量

ビーズも含めて、総重量は 180g。

(2) 考察

1) 作者

ギレルモ・デ・オズマはフォルチュニイのドレス作品を 5 種類に分類している¹⁾。デルフォス、長いガウン、絹のオーヴァーガーメント、ヴェルヴェット・オーヴァーガーメント、舞台衣装と宗教服である。3 番目の絹のオーヴァーガーメントはいずれも薄物製で、ステンシルが施され、デルフォスの上から羽織るためのものを指しており、本品はオズマが例として掲げている写真のうちの一つとほぼ同一と見受けられる。

オズマの著書ではモノクローム写真で小さく印刷されているが、バルベリ他 3 名による著作とデシヨ他 1 名による著作には、本品と文様も衣服の形態もほぼ同一と見られる作品のクローズアップされたカラー写真が掲載されている (図 8)²⁾。赤い (説明によればルビー色の) デルフォスの上に重ねて着ているため、地色が部分的に赤く見えるが、全体では本学の作品と同様、黒と見られる。この写真から、後述の通りステンシルの色に違いがあるものの、衣服全体の形態とステンシルによる文様の形、透き通った生地質感、ビーズから、本品と同様であることが伺え、本品をフォルチュニイの作品と認めることができる。

2) 制作年代

本品の購入先は入手時点の情報から、「1910 年ごろ」としている。上述のバルベリ他の図録では本品とステンシルの色のみ異なる作品を「1909 年」としている。

これに対して、オズマは 1916 年に発行されたアメリカの文献に掲載された、恐らく同一と見られるモノクローム写真を掲載している³⁾。但しこのことは制作年を推定する際に、あまり有力な資料にはならない。そのアメリカの文献は雑誌ではなく単行本であることから、当時の出版の状況から必ずしも最新の作品を紹介することは可能ではなく、恐らく出版時点よりは幾分早い年代の制作ということが考えられる。

またフォルチュニイがどの程度の期間、同一の作品を繰り返して制作したかは明らかでは無い



図 8 ルビー色のデルフォスと葡萄文様
ステンシルのオーヴァーガーメント

が、決して同一のデザインに留まることはなかったともされ、その意味では本品も 1909 年から大きく離れることは無く、その前後の制作とみなすのが適当と考えられる。

3) ステンシルについて

前身頃に大きく表された文様、裾、脇、袖下に続く繰り返される小さな文様のいずれも、ルネサンス、特にイタリアの 15、16 世紀の織物に多く見られたざくろ文様の引用である。ざくろ文様では、完全に熟して開いた果実の中の種のついた部分をパイナップル状や松毬状に様式化し、デザインの中心としているものが多い。更に、この松毬部分のほかに、わずかにほころび始めているが、まだほとんど閉じたままのざくろの実を組み合わせることもある。フォルチュニイの作品では、しばしばこの開きかけの実をややリアルに表現したモチーフと、松毬状に様式化されたモチーフとを組み合わせられた例が多々見られる。本品では前中心と後中心の大きなモチーフには松毬状の文様が大きく扱われているのに対して、脇や裾の繰り返しの帯状部分では、熟す前の実が松毬と同等の扱いとなっている（図 1-c,d）。2 種類のモチーフは文様化されてはいるが、葉や茎などと共に、自然で、写実性の高い表現となっている。

繰り返しの帯状部分の文様一単位の大きさは、上記の通り、幅、長さ共に一定ではなく、2,3mm の差が見られる。模様のでかれる方向が生地織り目方向に対して一定ではなく、生地方向による伸びの差異のために生じた誤差と見られる。

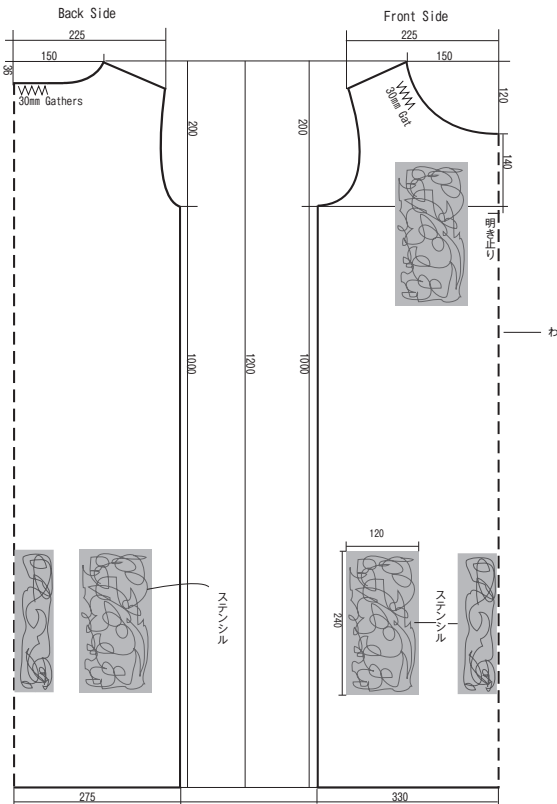
前後の裾の中央を軸として左右対称的に、また中心から左右へ、そして下から上へと向かうように配置され、全体で繰り返しの数は 60 に上る。脇から袖下に続く部分はカーブになっており、これに沿って左右対称的に型紙を置き換えてゆく困難さから、相当熟練した技術を用いたか、あるいはこの衣服全体の四分の一（例えば前右半分）の裁断図に合わせて、15 回繰り返した型紙を作成し、4 回に分けて染め上げた可能性が考えられる。

上記の通り、本品のステンシル部分の色は中程度の明るさの灰色であるが、拡大鏡を用いて観察すると、ステンシルの部分に、わずかに金属的な光を放つ細かな粒子が見られる。この粒子の実体については顕微鏡やより精密で科学的方法を用いて調査すべき点であるが、恐らく制作当初は金色に仕上げられていたのが、経年により剥落したものと推測される。

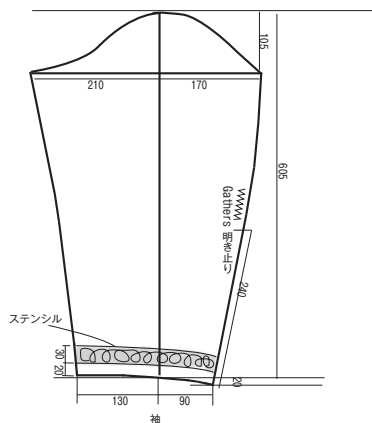
4) 裁断

身頃と袖が一続きに裁断され、平面的な裁断法であることは、フォルチュニイが西洋の伝統であるセット・イン・スリーブに対して、東洋的、あるいはビザンチン風裁断法の影響を受けて、平面的裁断法を好んだことを表している。袖の裁断に関しては、キモノ・スリーブ、ラグラン・スリーブ、ドルマン・スリーブなどの裁ち出し袖では、水平に横に広げた状態、あるいはやや胴体から手先を離して斜めに下ろした状態に裁断される。本品においては、逆に手を斜め上に上げているような形に裁断されている点は、極めて異例と言えよう（図 3-a,b）。民族服や歴史服の裁断図を調査したが、同様な例には現時点では遭遇していない。実際に着用した場合、着にくさ、動きにくさなどの問題は一切生じず、見た目にもごく自然である。

衿ぐりに関しては、和裁風に表現するならば、後衿肩開きと前衿肩開きが、片側で 25mm の差が



Unit:mm
Measured and generated by Keiko Nohzawa
図9-a 作品2 身頃のパターン



Unit:mm
Measured and generated by Keiko Nohzawa

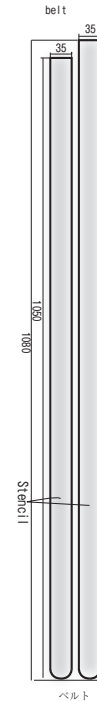


図9-c 作品2 ベルト

あることが特徴である。これによって生じる前面中央部分のゆとりが胸の隆起をカバーすることになり、着用時にはやはり自然に落ち着く。単純でありながら、巧みな効果を生む方法といえよう。

5) 生地

オズマらの文献では「gauze」と表現されているこの生地の組織は、明らかにわが国の絹である。しかし恐らく糸が細く、単位当りの本数が少ないためであろう、より透明感がある。フォルチュニが中国や日本の絹を用いていたとされるが、上述の通り、布幅は最大で1580mm必要であることから、日本というよりは中国産と見るべきと推測されるが、明治末期のわが国ですでに輸出用に幅広の生地を生産していたか、詳らかではない。

2. 赤ヴェルヴェット地葡萄文様ステンシル オーヴァーガーメント

(1) 調査結果

深い赤のヴェルヴェットにステンシルを施した、長袖つき、ミディ丈の衣服で、前はバストライン近くまで開き、頭からくぐって着用する。購入先では1920年代の制作としている。

1) 裁断

作品1と異なり、セット・イン・スリーブのため、袖ぐり、袖山のある、洋服らしい裁断法であるが、脇線は直線で、胸のふくらみ分はダーツや切り替えを使わず、衿ぐりのギャザーで処理している。

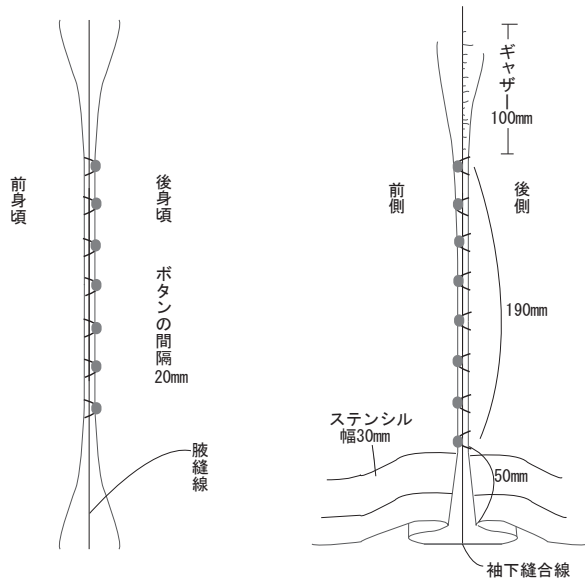


図10 作品2
ビーズによるウエストラインと袖幅の調整

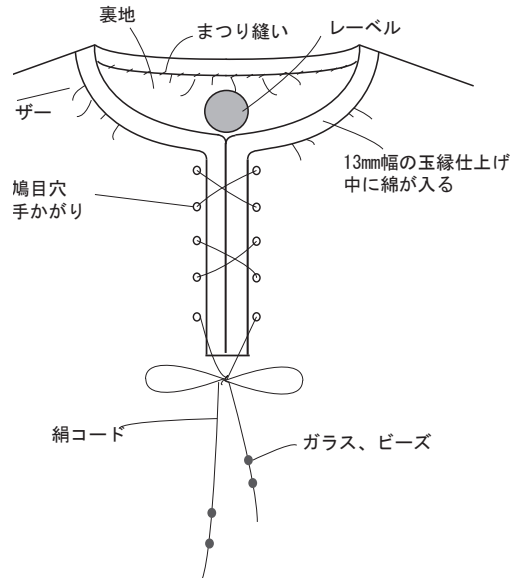


図11 作品2 衿と前立ての始末

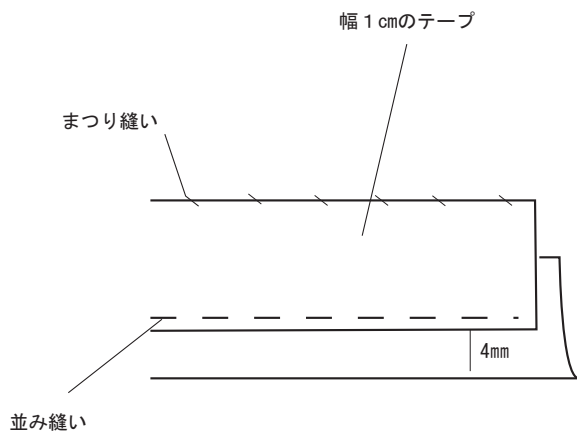


図12 作品2 裾の始末

また袖山は低く、身頃の袖ぐりは前後の形はほとんど同型で、全体として比較的ゆったりした裁断である（図9）。

脇と袖にはビーズとループがつき、これを閉じてウエストのくびれと、前腕から手首への細くなる形にそれぞれ合わせている（図2-b、図10）。

2) 生地

表に深い赤の絹のヴェルヴェット。

裏に淡黄色薄手の羽二重。

3) 縫製

裏が張ってあるため、全体を見ることはできないが、表はミシン、裏は手縫いの箇所が多く見られる。衿と前立ては表地のバイヤス地で玉縁仕上げとしているが、ほつれた部分からは中に綿を詰めているのが見える（図2-c、図11）。

裾は幅10mmのテープを貼り、表地にまつり縫いで仕上げている（図12）。裏地は60mm折り返して並縫いで抑えている。

4) 装飾

ステンシル 金色。葡萄の葉と蔓、枝を様式化したパターン（図2-e）。

前後の裾に近い位置に、24mm×12mmの長方形の模様を3個ずつ、左右の胸に1個ずつ、計8個。

袖口とベルトに30mm幅、衿ぐりと前立てに15mm幅の帯状ステンシル（図2-b）。

ビーズ 直径7mm、長さ5mm。管玉型。乳白色に黒と赤い筋入り。

左右袖口に8個ずつ。左右脇に7個ずつ。いずれもループにかけて、幅の調整の機能を持つ。

前開きの紐締め用の紐の先に2個ずつ、計4個。

5) レーベル

裏側、後衿ぐり近くに、1909年以降用いられたデザインのレーベルつき。円形のファイユ地に「MARIANO FORTUNY VENISE」の文字が織り出されている（図2-d）。

6) 重量

ヴェルヴェットは重い印象があるが、本品は極めて軽い。ドレス全体で280gである。

(2) 考察

1) 作者

管見では、文献中、本品と同一の作品はほとんど見られないが、唯一、「ボワレとフォルチュニイ コルセットをめぐる冒険展」（神戸ファッション美術館、鳥根県立石見美術館⁴⁾）に出品された作品に、色とステンシルの文様は異なるが、同型の作品（共立女子大学所蔵品）が含まれている。本品はレーベルがついていることもあり、フォルチュニイの作品とみなすことが出来る。

2) 分類と制作年代

着丈1200mmであり、身長1600mmの女性が着て、膝が優に隠れる程度の長さである。筆者はこのドレスのかつての所有者が、裾を切って丈を詰めた可能性を考えたが、上述のように、共立女子大学所蔵の作品と丈がほぼ同じであることから、そうした仕立て直しが無く、オリジナルな形態を保っているものと判断できる。

このことを前提にすると、フォルチュニイの作品中、ドレスでこの丈のものは文献中見当たらず、この丈の例はオズマの分類のヴェルヴェット・オーヴァーガーメントの中でしか見出せない。比較的身幅がゆったりしていることから、本品は前明きではないが、デルフォスなどの薄手の素材のドレスの上に重ねて着用するヴェルヴェット・オーヴァーガーメントの類に入れる方が適切と考えられる。

この分類の場合フォルチュニイの衣服制作期間中、さまざまな丈のオーヴァーガーメントを制作しているため、その丈と制作年代とはほとんど関係が見出せない。従って本品の制作年代は1920年代と限定することは難しい。また「ボワレとフォルチュニイ コルセットをめぐる冒険展」で

は本学の作品と同型の作品をドレスと捉えて、1930年代としているが、30年代初期には一般にはドレス丈はむしろ長くなっていたことも勘案すると、やはり幾分疑問が残る。

現時点ではレーベルから1909年以降、彼の制作がほとんど休止状態に陥る1938年までの間という、広い期間を設定するしかなく、更なる調査を要することが判明した。

3) ステンシル

身頃に施された長方形のステンシルは、120mmの正方形の型を2回繰り返したものである(図2-e)。

文様は一見、組紐文様にも見えるが、葡萄の葉と蔓を様式化したものである。葡萄の葉と蔓はコプトの織物に多く見られモチーフで、フォルチュニイのステンシルための図案の中には、コプトの葡萄模様をそっくり取り入れた例も見られる(図13)。

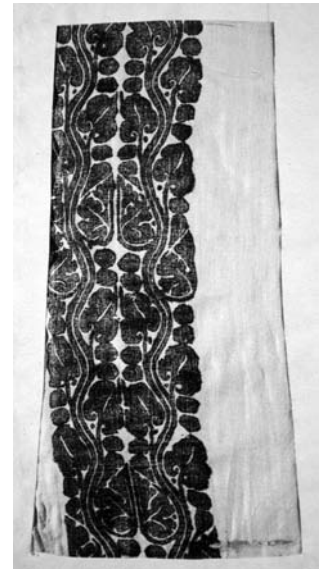


図13 コプトの文様を引用した葡萄文様
フォルチュニイ作

4) ビーズ

本品ではビーズは単なる装飾ではなく、脇の幅や、袖の幅を調整するためのボタンの役割を担っている。この方式は中世末期の衣服における紐締めによる調整を髣髴とさせる。

5) 裁断法と生地

直線的で、前後差の少ない、いわば平面的な裁断で、ビザンチン時代の裁断法を思わせるが、前身頃幅の方が後身頃より55mm広いため、身頃の脇の縫合線と、それに続く袖下の縫合線は、後側に20mmほどずれることになり、上記のビーズとループによる調整部分が、効果的に見えるようになっている。また袖の調整のラインも、後側から効果的に見える。

ドレス全体が極めて軽く、それは着用者に着心地の良さをもたらすと同時に、観る者にもヴェルヴェットの高雅な雰囲気と同時に軽やかな印象を与える。ヴェルヴェットの20世紀的引用法と言えよう。

まとめ

作品1、2共に、フォルチュニイの作品であることが認められる。

作品1は、1909年前後に制作された絹(ゴーズ)製のオーヴァーガーメントであり、その灰色のステンシルは、本来は金色に仕上げられていたと考えられる。またその周囲の帯状のステンシルは、15ずつをひとまとめにした大きな型紙を用いたと推測される。また前後ほぼ同型に裁断されているが、前の方が左右で50mm幅広く、その分は衿明きの幅の差として処理され、身頃から裁ち出した袖は斜め上方に上げた形をとったユニークな裁断を行っていることがわかった。このように、フォルチュニイは歴史服や民族服の引用だけではなく、裁断法に独創性を発揮していた。

作品2はワンピース・ドレスとして1枚だけで着用する目的のものではなく、デルフォスなどのドレスの上から重ねて着用するための衣服であることが推測され、シンプルではあるが身体への

フィット、美的効果を配慮した構造を持っていることが分かった。また極めて軽い生地を用いて、着易さ、着心地の良さを大切にするばかりか、全体の印象の軽さを追求していたことも伺える。

またステンシルのデザインは、ざくろと並んでフォルチュニイが好んだ葡萄をモチーフにして、コプトの文様を引用している。さらに制作年代は、すでに文献に見られる 1930 年代とする説には疑問が残るが、現時点では 1909 年から 38 年までの期間のうち、細かな特定をする条件は充分ではない。

今後、作品 1 については、ステンシルの色が果たして金であったかを確認するための科学的調査が、また作品 2 については、制作年代と着方に関して、より幅広い文献等の調査が必要である。

註

- 1) Osma, de Guillermo; Fortuny, *His Life and Work of Mariano Fortuny*; Rizzoli, New York, 1980, p.210-213
- 2) Barberis, Maurizio, Franzini, Claudio, Tosa, Marco & Foso, Silvio; *Mariano Fortuny*; Marsilio, Venezia, 1999
Desshodt, Anne-Marie & Poli, Doretta Davanzo; *Fortuny*; Edition du Regard, Paris, 2000, Harry N, Abrams, inc., publishers, 2001
- 3) Osma, de Guillermo; Fortuny, *The Life and Work of Mariano Fortuny*; Rizzoli, New York, 1980, p.137
オズマは Bella Armstrong Whitney : *What to wear: a Book for women*. Battle Creek, Michigan, 1916 から引用し、1916 年当時、アメリカでフォルチュニイの作品を、家庭内だけではなく、外出用にも着ることを勧めた内容を、写真と共に引用している。
- 4) 南目美輝編 ポワレとフォルチュニイ コルセットをめぐる冒険、神戸ファッション美術館、島根県立石見美術館、2008、p.11, 図 31

図版出典

図 8, 12 Barberis, Maurizio, Franzini, Claudio, Tosa, Marco & Foso, Silvio; *Mariano Fortuny*; Marsilio, Venezia, 1999

注外参考文献

Fortuny; Fashion Institute of Technology, New York & The Art Institute of Chicago, 1981
Martin, Richard & Koda, Harold; *Flair, Fashion Collected by Tina Chow*; Rizzoli, New York, 1992
Desveaux, Delphine; *Fortuny*; Thames and Hudson, London, 1998
京都服飾文化研究財団 布に魔術をかけたヴェニス巨人 フォルチュニイ展 東京 1985 年